繪本太閤記　二編　五

へ伊13
1833
17

繪本太閤記二篇巻之五

目録

佐々木承禎與信長和睦
坂井右近與浅井朝倉之兵戦堅田浦
藤吉郎智破浅井朝倉勢
依勅命三家和睦

特 へ13
1833
17

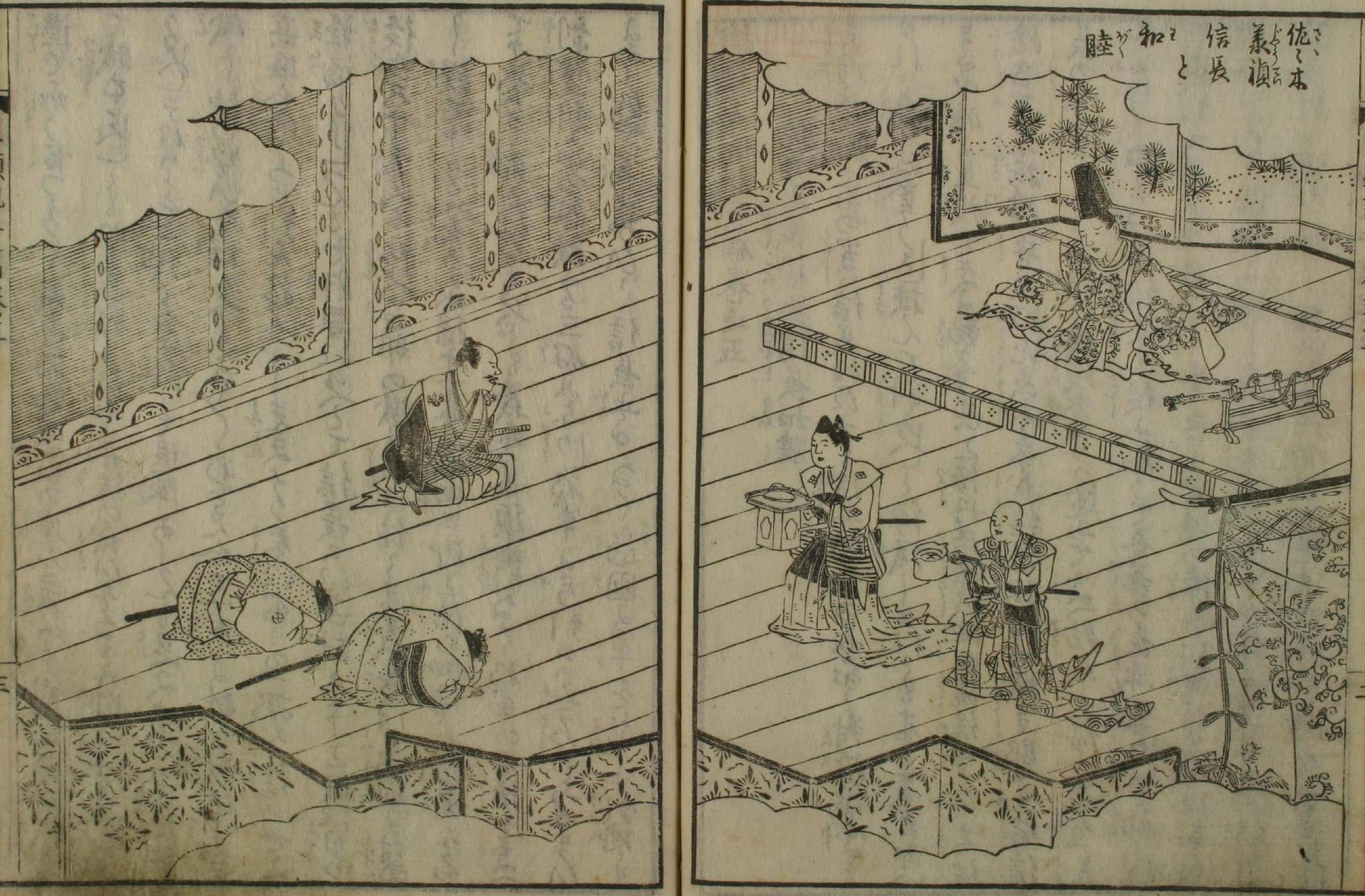
磯野丹波守降ニ信長一

毛受勝助返ニ取馬印一

繪本太閤記二篇巻之五

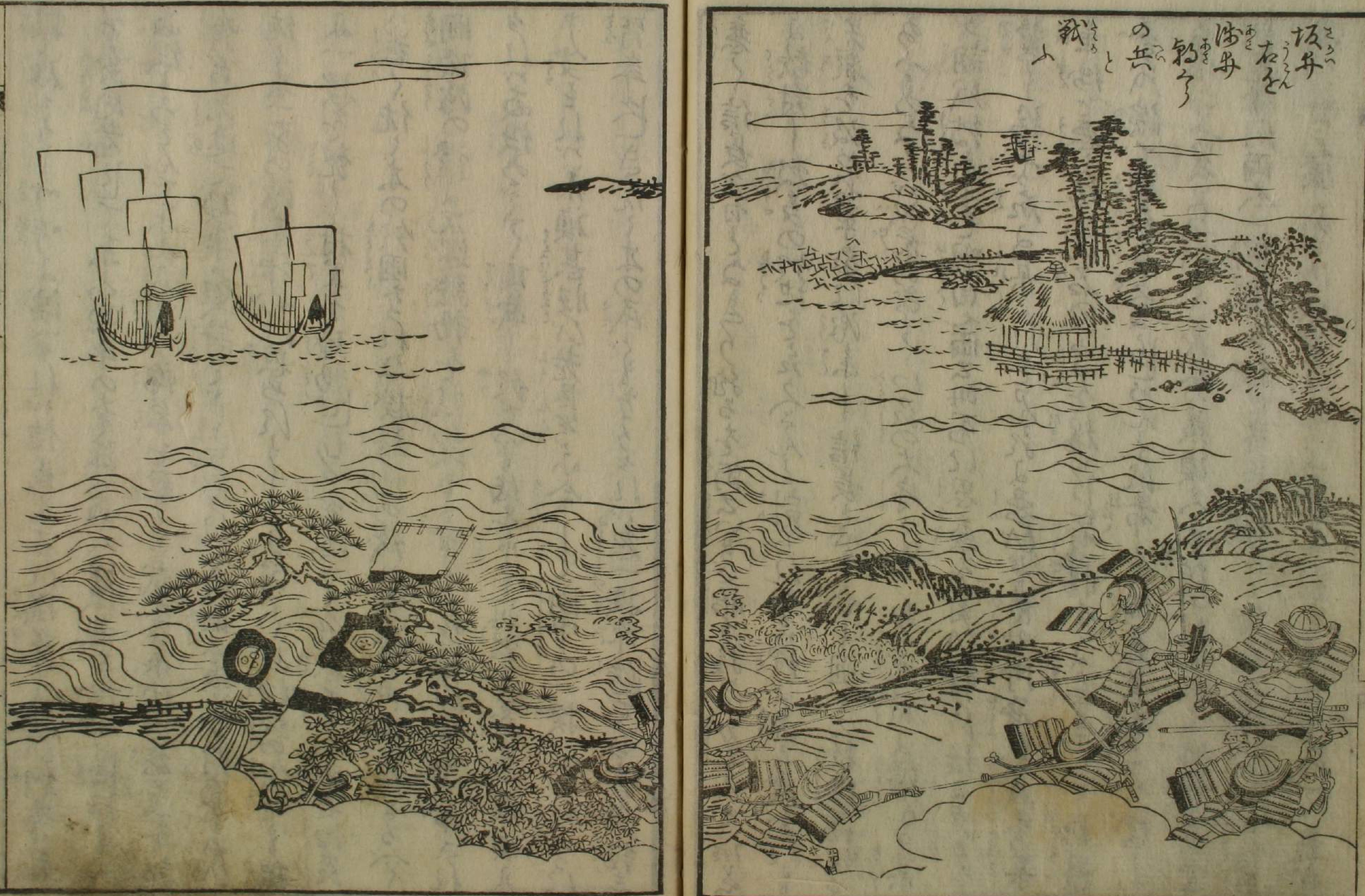
佐々木義賢與ニ信長ー和睦

去程に三好一家の党ハ信長江北にありて浅井朝倉の両家と對陣の虚を窺え知れバ急に攻登らんとし挟んで討取らんと評議しけれども木下藤吉郎ハまづ中國に在陣して更に動かず其上攝丹兵庫の池田筑後守茨木佐渡守荒木攝津守三好左京太夫義継等攝津の城主皆信長の味方となりて三好の徒攻登らバ途ニ支へ妨んと論じ其氣色を察しぬれバ其ゝ評定も徒ニなりて無益の長陣要なしと諸将ハ佗國へ引取る處に抑ひく秀吉も中國の陣を引拂ひ置て坂本乃御陣へ參り信長に謁し右の次第を言上なしけれバ信長甚よろこび給ひ藤吉郎が勞を謝し扨此度の心配を物語り計を問ひ給ふ藤吉郎


佐々木義賢信長と和睦

謹で承り居つゝ浅井朝倉両家の運を考るに此度の戦ひには
て滅亡をなしとも拘はり侍らじ今無謀の戦ひをなさば頓て味方敗亡す
るべしされバとて一戦もなさずして退陣あらんも思ふへ味方の英気を
減じ敵の勢ひを増さしむべしよくよく時を見合て一軍に敵をおひしぎ
其塩合にてかろく引取給ふべし先是より前に示しの一揆を結ばせよ
静謐ならしめんこそ肝要に候へとて信長公に其計を申上直に自ら
従兵又十余人を随へ石部の城に赴き佐ゝ木義秀ハ兼頼に対面
し説て申さるゝハ去る永禄十一年義昭公御上洛の砌信長使者を以
て申入らるゝ旨ありしを以ても義秀兼頼殿引率なく却て軍の上洛を支へ
剰へ足利家の怨敵たる三好に与力し却て軍に弓引ハ不道のふるまひ
なかりしや寔に拘ひなく信長止む事なく当国に軍を發し領地を

悉く信長が有となりたりしを両公いまだ憤り給ひて力をたのんで信長
に敵對し数多の領地を亡ぼさんと計らひぬるは理に当らず今たとひ
先非を改め軍家に降参し信長と心を合し国々の敵徒と切従め
たまふものならバ織家のおろく江州の太守となり繁栄昔に増らん某
が詞に従ひ給ひて明白に両公此事に思慮を廻ひ給ひて後に勢力を
貫し給ふが為に某これをすゝめに来りぬれど首附御座取義秀某
卑怯と悪と給ひて名の一字を穢しる事は情ながら今に忘れがたく聊愚
意を演て国家長久ならしめんとふれ希くハ両君是をよく察し
あへりつゝ寔に拘ひなく義秀兼頼大に怒て三上候縁なる三雲
新左衛門両人に錦帛を持せ秀吉緒々も信長の陣へ送りし向後先
非を改め軍家の御味方に参り寸忠を励し申さんよしく懇願


坂井右近
浅井勘八の兵と
戦ふ

其様なりし所へ叮嚀に演べければ信長も大に満足し給ひ則秀吉を案内者として東山なる軍の本陣へ両人の使者を送り遣しければ両使よろこんで東山に到り陣営を訪ね義景并兼頼が舎に至り意を訟秀吉先達て将軍家へ計りて申上置れば義昭公両人に対面し給ひ佐々木一家の浪人等神妙に思召よし上意ありて且江州の郷民ども援け一揆を起し村里を騒動せしむる条安からず思召るゝ處之江州は悉く佐々木の領国なれば一揆静謐の儀は義景并兼頼に任さるべく間諸方の浪人等騒動を鎮むべしと命し給ひ御盃を下されければ両使有がたく頂戴し拝して両使やがて此趣を義景兼頼に申しければ兼頼甚悦び老臣等に命じて国中の一揆原を鎮むるに皆年比し佐々木の民どもなりければ忽一揆平治して不日の騒動志

づまりたる是秀吉が謀の為せる所なれば信長公も深く称美まし
くおぼして心を保じ給ふ

坂井右近与浅井朝倉戦塩田浦

小田浅井の両陣九月より十一月の末まで互に戦ひもなくかつゝ合て居たりけるが信長の功臣坂井右近は姉川の合戦に両度まで[illegible]を割られ今度浅井との合戦には目ざましき働きをせしと家の恥辱を雪んと益て士を居たりけるに六十余日の対陣に矢一ツも射ざりければ本意なき事に思ひけるにもして功を立てんやとさまざま工夫を廻しける小谷城より運び来る兵粮米悉く塩田の浦に積置と聞き右近此兵粮米を奪ひ取らんと塩田の住人猪飼甚助馬場孫次郎居初又治郎といふ力者三人を語ひ案内者として

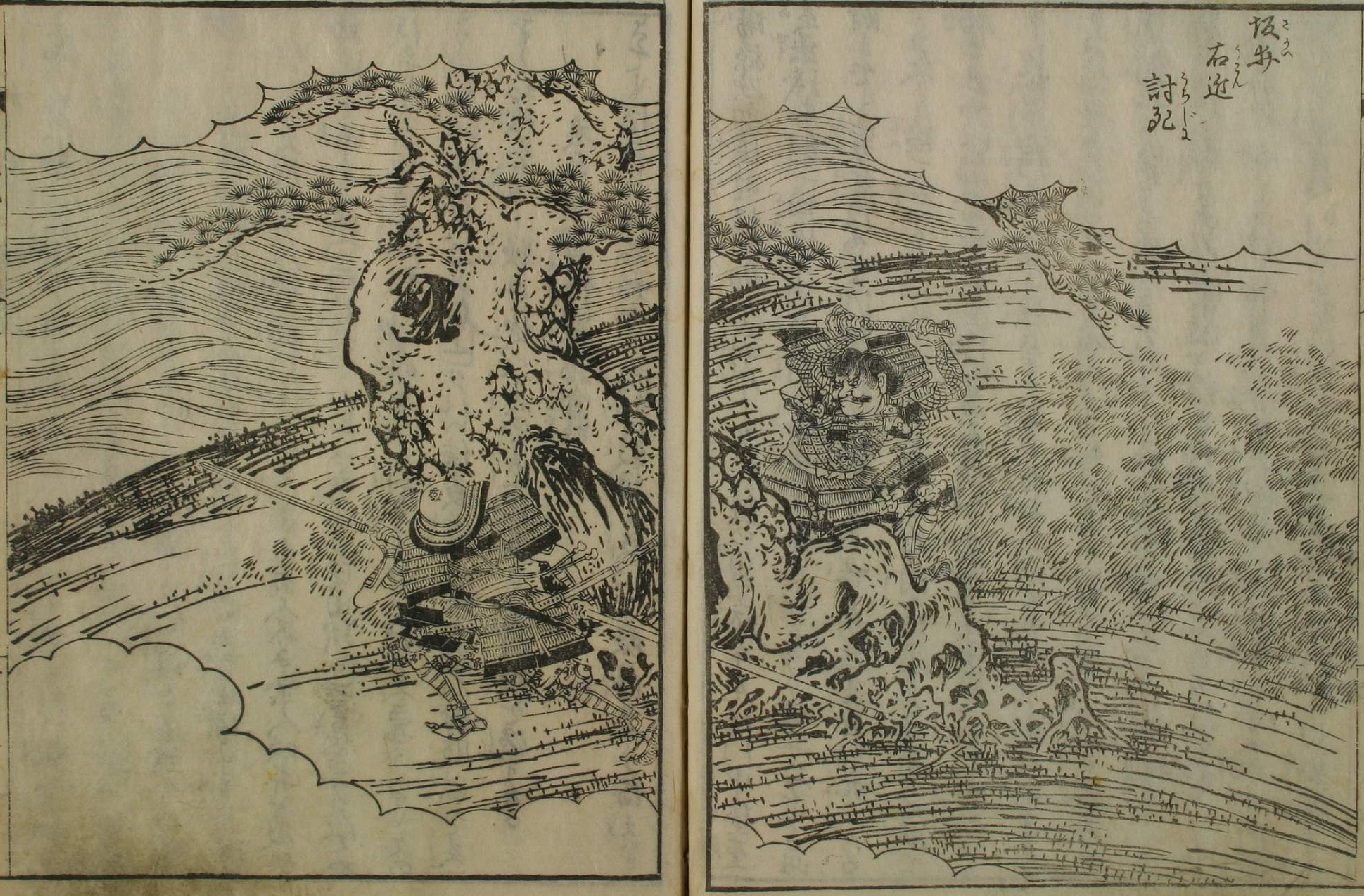
十一月廿五日の夜に勢五百余人密に船に取乗り窪田の浦に押
渡り不意に閉の者を殺したる故幸に切立れば思ひかけなき
鎌倉勢一人も戦ふものなく皆ちり〴〵に逃さりける右近心のまゝに粮
米は船に積信長公の本陣へ送り越其身の取乗べき船も悉く兵
粮を積ければ又百人の士率しとゞり小窪田の浦に陣を兵て船の
入る故待居たる所に窪田の浦に兵粮を守居る小国勢鎌倉家臣
の本陣へ注進の使者として逃来り去ほどに兵粮を敵のために
奪われぬるよし告ければ義景安からず思ひ浅井長政にも告せ
率に式部太輔景鏡山崎長門守前波藤右衛門に小国勢三千人を
与へ窪田浦の敵を討べしと下知ありまた三将命を受て廿六日の暁天に
船に取乗り窪田をさして馳て行義景勢も浅井の家臣

赤尾美作守同勘助浅井七郎等に二千余人を属せしめ後陣に続て
打立しむ坂井右近投られける勇士なれば敵方の兵は船を見捨ようも
待べしと立て待けるが鎌倉勢の陣に立らんとする事は會釈もなく切てゝ
里余二里三里に潮水の中へ斬込ければ鎌倉方多勢なりといへども陸
にも地り立ん待べも兵に寄られければさん〴〵に突崩され死傷のものの数
をしらず既に足も踏ためず濁水一面に後陣の勢大浪と押切馳来り坂井
が勢の右手より岸に上りて揉立揉槍にて突立ければ坂井が勢勇と雖て
戦ふといへども敵は数勢又余人はわかに後より又百余人を引きくと突みだ
され思ひは盛へ一向むかう逃るといふなく引ける右近怒て士率を励ほ
自分先登に馳出て槍を揮て敵に向かへば小へ追かけて此方へめぐり出
南にかけへてば西にかゝられ必死になりて戦ふまで坂井が良等同蘭十郎

其二

浦野源太郎同源八何れも皆〳〵たゞならず我劣らじと多勢の中に
突て入り討せじと戦へバ当国の勇士馬場猪飼居初の三人も坂井主従
討とらんと続て是も馳通れバ浅井朝倉が大勢後の兵士に切てかゝる
右往左往に散乱をされども大軍新手入替次第〳〵に未だ詰ければ
坂井が勢勇気といへども其身金石にあらざれバ次第〳〵に数ヶ所の手負と
なり今ハこれまでと見へける中にも居初又治郎ハ浅井の家士赤尾勘
助と槍を合せ暫時計戦ひしが居初終に力尽き勘助が為に突殺さ
る是を見て猪飼甚助走り来り勘助と戦ひけるが勘助居初を討し時
右の腕首をきられ突通され戦ひ心に任せざれバいさや組んと槍投捨
甚助に組付しに手に劣らぬ壮士なれバ暫く勝負も見へざりけれど
勘助痛手を負ひしかバ終に力尽きて甚助に討れける其外坂井方馬

場孫次郎浦野源八郎も討死しければ敵の勇士堀平左衛門中埜重三
郎浅井新七田辺平内等皆〳〵乱軍の中に斬られける坂井右近も此
時までも勇気たゆまず切出て戦ひけるが味方の兵士悉く討死しける
と見へて続て来る者一人もなしよき敵もがな討死せんと四方を白眼で
扣ゆる所に朝倉の勇士前波藤右衛門と名乗り右近を目がけ討て
かゝれバ右近疲れたる上血に染みたる太刀をおつとりやさしき敵のふるまひ
かな信長が家の子なる者ありと知れたる坂井右近正尚が最期の
道連れにハ恐らねバこそ来れと入まぜもせず唯二人ずつ計戦ひけるが
坂井が切込太刀さきに前波が槍を切おられ太刀に手をかけ抜んとす
る所右近得たりとうけて切付れバ兜の真向三寸計切割れ目に血入りて
開くる事能ハざれども前波ハさすが勇士なれバ大手をひろげ組付てよ


坂井右近討死

まかりはまかり力限りと戦ひしが今は最早逃るゝ所の士卒なれば細かれしく
右近は首級をとられけり右近も今は力労れ再び戦ふ事ならずと思ひて
されば鎧脱捨て何ぞ腹を切りて堅田の浦に戸は錠など名のみ今の世に
残りたる此時信長公は坂井右近が兵粮を襲ひ堅田浦に宿陣せし
と聞かれ大いに怒り佐久間信盛稲葉一徹氏家両人並に余人坂井を救ひ
申すべしと命じ給へば両将畏つて船に乗り堅田に至りて急ぎけるにや
浅井朝倉の勢退散し坂井主従悉く討死しけるはせん方なき事なりその
まゝ引取り此旨を信長に言上しければ信長深く惜み給ひ我股肱を失へ
りと紅涙を流し歎き給へば一座の勇士猛卒も共に袂を湿しける

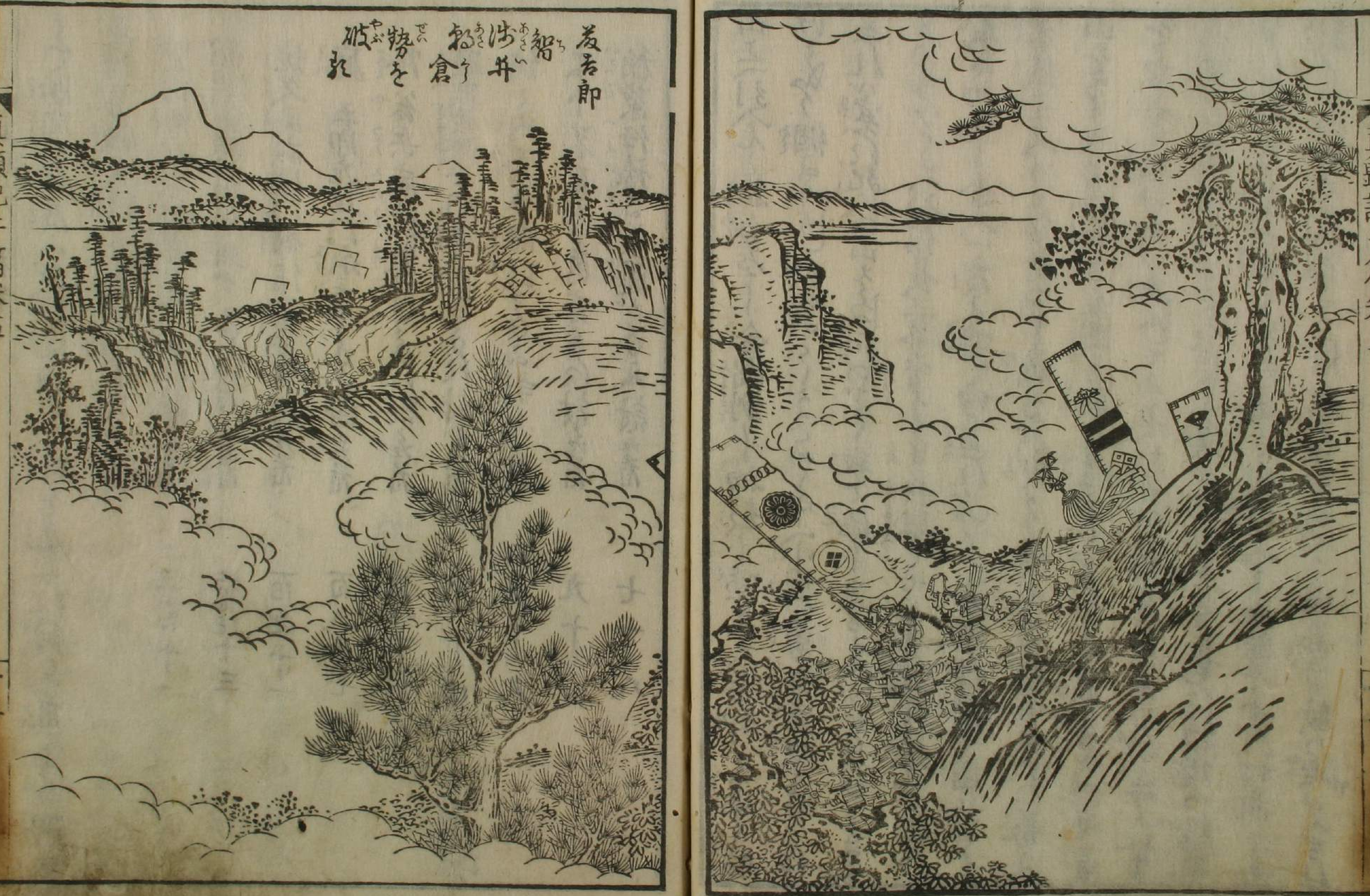
藤吉郎智破浅井朝倉勢

さても信長公は浅井朝倉と対陣数月に及べども敵は労れず味方も

なく味方の兵士は寒気に堪へかねて比叡山に籠りし敵の烈しさに対陣を
かまへたるのみなれば病弱者多かりしが甚だよからず打続き味方の勇士討死
し何となく陣中穏かならず物語りしく皆故郷を恋ひたる信長公体を
御覧じかくては味方難儀なるべしとて木下藤吉郎を召し先に立たせし
おそらく一軍をもつて合戦を止め退陣せずやと思ふ間より手配致し
給へと仰せければ藤吉郎謹んで承りさてそれよりして敵味方の眼を覚させ
ずやさんとて謀計を信長公へ言上し十一月廿七日諸陣に令して軍を
始め退陣の用意致さしむ廿八日の夜に入りて陣々へ皆謀計を申し含
労れたる兵士に松明を持せ三井寺の方へ退かしめ信長公は間道より之れ
も三井寺に移り給ひ其余の諸将も悉く陣を開きて潜かに埋伏し相労
を見合せ切て出でんと構へたり浅井長政朝倉義景は此体を見て敵は長

陣に労れ運気尽きて寒さに堪かね今宵陣払して引退くと見えたりとて追かけ
打崩せしとて両家の軍兵山上の衆徒数を尽して山谷より小田の陣中
に入しと見れバ虚しく篝のみを焚捨て敵一人もなかりされバ謀れたりと思ひも
よらざれバさてハ早く引退きける抱からん急に追詰討んと彼三将も
引し所なるを目当にて息をもつかず追ける所に木下藤吉郎ハ大ぜい
の本陣より後の備へを蒙り居たりしが浅井朝倉の両勢大津山を
下りぬと見てされバ兼て用意の狼烟をあげ揚る程こそあれ堤に伏たる小田
の大勢皆一同に起り立山谷も崩るゝ計周の草を蹴立堅横のきらひなく
鉄炮を打かけ槍長刀を振り思ひくに突崩き叡山より宇佐山の
下り迄で立続ける浅井朝倉が大勢を七八段に断切て切倒し薙たふし
敵を討ち数を尽しぐ浅井朝倉山門の兵士等狼狽騒ぎ我先に

山上へ引返さんと押合へし合踏倒し押殺し味方の大勢却て退く妨
げとなり網にかゝりし魚のおどろきうごめく中へ小田の勇兵会釈もなく切
立れバ実に死人の山を築き川の如く血を流し見るもいぶせきありさまなり
是を見るより大ぜい信長三井寺より雑兵勝て七千余騎宇佐山の麓にて木下
藤吉郎三千余人一度に鳴て切て出れバさしもの大狼狽騒ぐ囲兵へども
前後を見すり見る者なく覆ろなる折から妻わける浅井長政は一番に
山をおりなるが敵中に包囲れ既に危くみへたるに赤尾美作守勇
をふるひて駆け出し身を以て山上へ引とれバ朝倉義景ハ是を見て扣へたる
大勢なれバ此所もいまだ山谷より得ど打出んとする所に山峰の後軍
されバ味方を救ふ勇も出ず遠くより逆へ入り両勢十分に切崩され
散々に打なされ落失て信長に知らせ終て山に登る敵ハ追るゝもあれ



藤吉郎智浅井朝倉が勢を破る

とて勝閧を三度あげ宇佐山に本陣を居られ討取首を実へ検ス
其時首帳に記する略左のごとし

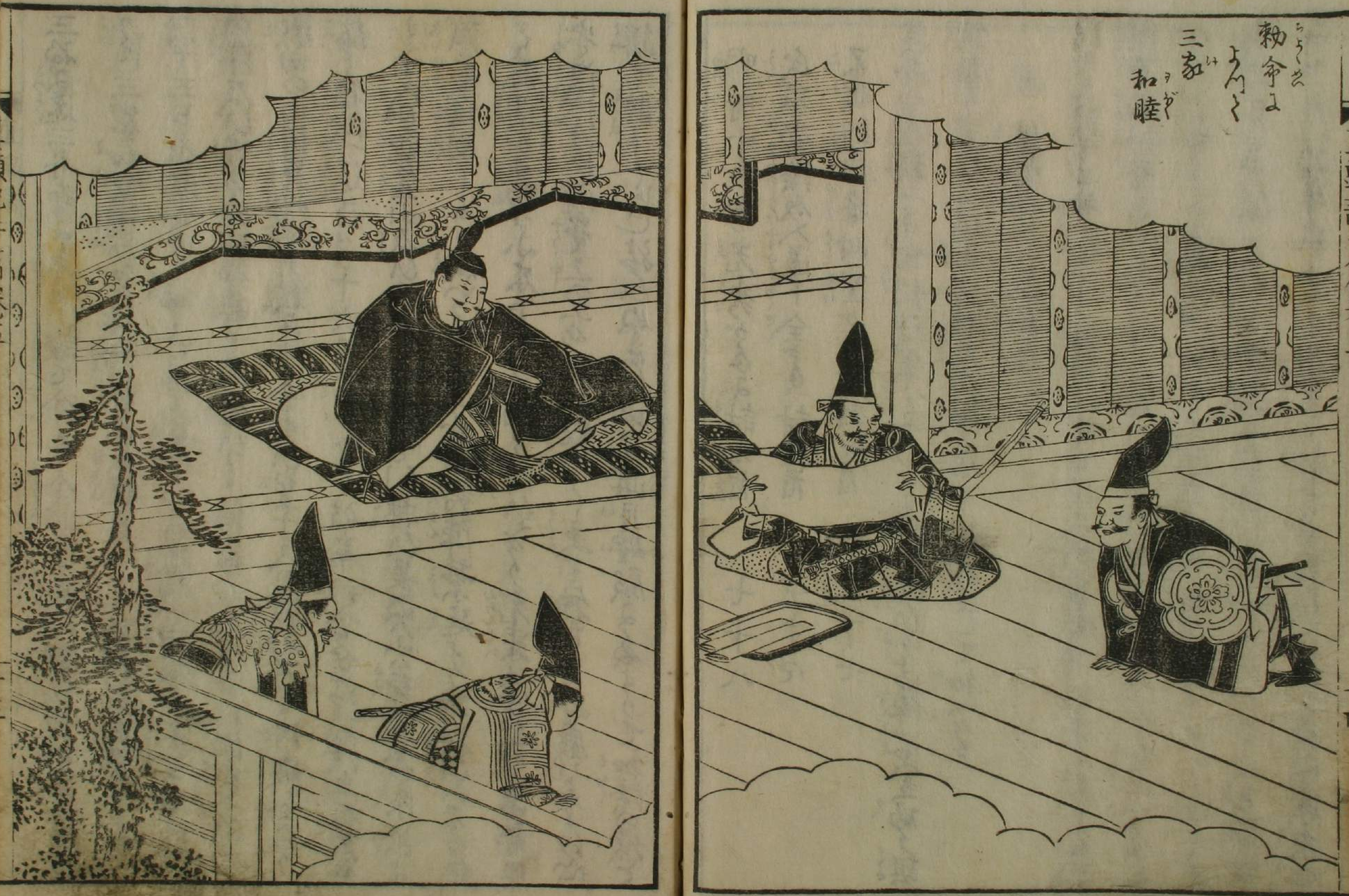
柴田修理之進勝家が手に討取首　三百十一
池田勝三郎信輝が手に討取首　二百四十三
佐久間右衛門尉信盛が手に討取首　百九十一
庭五郎左衛門永秀が手に討取首　百八十七
蜂谷兵庫頭頼隆が手に討取首　百八十六
前田又左衛門利家が手に討取首　百十四
佐々内蔵助成政が手に討取首　九十五
木下藤吉郎秀吉手に討取首　九十四
稲葉伊豫守長通が手に討取首　七十八

明智十兵衛光秀が手に討取首　七十八
氏家常陸介入道卜全が手に討取首　三十四
不破河内守時重が手に討取首　二十七

其外の首数二千余級諸軍いづれも勇み悦びての陣所へ立帰り旗指物を立つらね猶軍威以前に十倍し歓抃として扣へける

依勅命三家和陸

同十二月十日禁廷より勅使として日野大納言殿并に将軍家の上使二階堂駿河守三井寺に入らせ給ひ小田浅井朝倉の三家和睦をなし軍兵の苦しみを救ふべし就中王城近く対陣を止め干戈を納むる其恐れなきにあらず早く軍陣を引払ひ領国へ退くべき旨綸旨を下されし将軍家よりも御書を賜ふに依ひて信長長政義景の

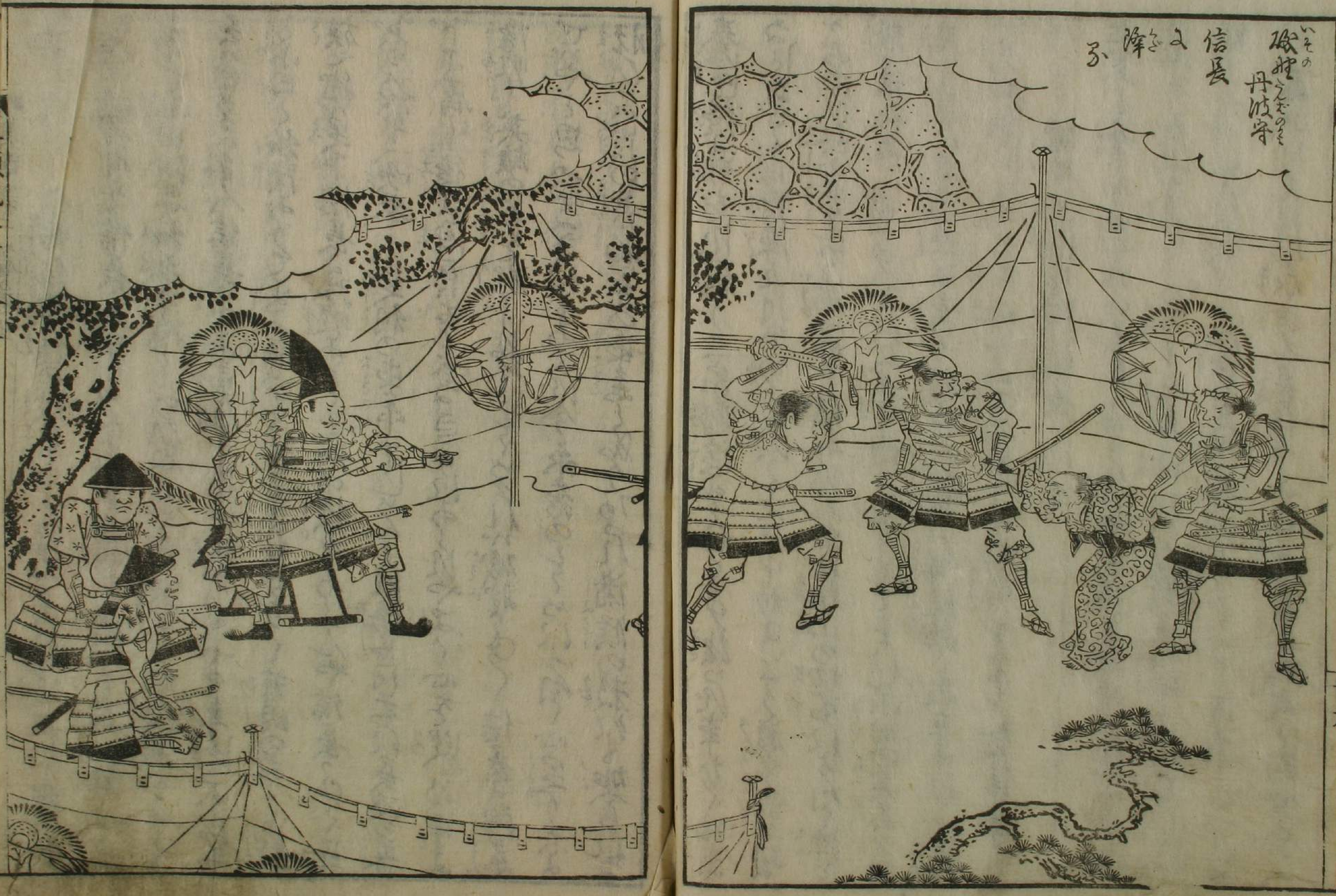

勅命によりて
三家和睦

三ねる早速三井寺に参し謹で命を領掌し頓て盟約の神文をとり
且三家和平調ひられば勅使甚だ喜悦ましく足利の上使ともに
同十三日京都にこそ帰らせ給ふ翌十四日の曉小田信長志賀宇佐山
の陣及び味方の諸ね悉く陣払ひし信長公は船に召し湖水を渡り
勢田の山岡美作守が城に入らせ給ひ翌十五日戦場を御暇たまはり
歸く岐阜へ退きける十六日に事なく岐阜に入らせ給へば浅井朝倉
も十五日壺笠山及び叡ヶ峰の陣を引払ひ長政は小谷に入義景は越
前へ帰国しける抑いかにして此度の對陣禁廷より御扱ひありけるや
と其謂を尋ぬるに木下藤吉郎が計ひなりと元来藤吉郎京都の
守護代たりし時附僧上人の方へ近く親しく交り就中日野殿は忝け心
解て睦じく且旧ひぬれば密に此日野殿に頼よりて和睦の縁と

奏聞し終に勅を下し綸旨三家に勅諚よそむくべき事なく和國
なさしめける此對陣九月下旬より今十二月中旬に至る迄厳寒を面と裂
が如く兵士皆ん病に臥すを浅井朝倉は比叡山の切所によつて陣を
張ば信長進で戦ふ事叶はず又退て国に帰らんとすれば小田の英名家
廃るを恐れて進退共に窮り終には将軍の禅定を取させしが不論
一先和国に帰て計略をなして朝家をも討破ん事が智謀なり

磯野丹波守降二信長一

其年も暮元亀二年の春なりける佐和山の城主磯野丹波守員昌
は浅井長政が幕下に属し去年姉川の合戦に因る勇戦を顕
欲も味方も驚歎せし壮士にて足を押へのみとて百と奉公とへるに
に庭又郎左衛門永秀を遣しけるに永秀元来磯野と面會の上之


磯野丹波守
信長え
諫る

ありて都の音信書翰の往来あれど懇ろに使へけれバ永秀と
を伺ひ磯野を信長に随しめんと心中に含み居たるが此比勅命に
よりて小田浅井和平の縁となりしにより親とて縁者をなし
さハせざるハ主人信長足下の勇壮を感じ慕ひあふの余に今浅井
と小田と和睦ありて互に隔心をとじんさむるなく前時のまゝく親
族之儀ハ足下信長に随順ありとも何の疑あらんや信長の如く足
下の将軍へ吹挙し足利の幕下にしめんとハ信長日本に長政の幕
下に属し後に追ハ本意なきうにあらざれやまく心を改め将軍に
帰服し英雄の志を顕し後くとちやうれバ磯野のまゝく信長に浮気
せバやと思ふ心なきにもあらねど今永秀のとゞめにより心定り太に
服びて不肖の其将軍の幕下となりなバ諸候の数にも加へられ

バ日ごろの本望何かあるべき是にまさらんや永秀大いに悦び信長公
の御前宜しく吹挙たのミ入よし謹で返書しけれバ永秀急ぎ此旨を
信長公へ言上しけれバ信長も悦びあひ丹波守をいかなる治の城主
となし庭久郎左衛門を佐和山の城主にし磯野を浮気なさ
めたる功を賞し後に庭磯野ありがたく今度召上られ城に籠り
たる浅井長政此事を聞て大に怒り磯野が老母を人質として浅
井が方にありしを引出して首を刎獄門にかけあるうる是より浅井
の旗下に属せし勇士悉く長政の不仁を悪み大尾の城主中島
惣左衛門朝妻の城主新庄駿河守等皆浅井家を離散して信
長の幕下に属しけれバ更に小田家の勢ひを増し日々に壊之長
政父子いよいよ憤り此恨をはらさんとさまざま工夫を凝しけるが

其二

一計を案じ出し摂州石山本願寺をたのミに此の寺々を催し
かゝる生死をしりの門徒なるなれバ本願寺へ参るようの法催足と馳集る坊
主達より雀浦の誓願寺新庄の金光寺枚本の常願寺上路の順
慶寺富須本の浄教寺益田の真宗寺唐崎の超照寺下坂の福照
寺等郷民どもをかり集め其勢都合二万余人蜂のごとく群て長
浜に発しけれバ浅井父子大に悦び小田方に与力せし小城どもを悉
切崩し其勢ひに信長を責べしとて堀秀治郎が籠る鎌の羽の城へ
押よせ一重二重に責かゝる城中の勢ハ死を必と防戦ふといへども
寄手は四ツ余る大勢なれバ新手を入替責かゝる程に既に落城に及ん
とせし此時秀吉ハ横山の城にありて此合戦を聞けれバ手勢一千人を
引率し旗指物を隠し何方の勢とも見えざるように出立寄手の勢

の後よりちかくと進みよれバ門徒の一揆敵か味方の兵へかゝると見
縁してあるかなるに秀吉郎下知して千生瓢箪の馬印をたかく
さし上小田の勇臣日本一の剛の者木下秀吉郎後詰のために向ふ
あり と大音に罵りて稲麻竹葦のごとく集りし一揆の中へ面もふ
らず切てかゝれバさしも敵の助勢なるぞ見遣て討立れし雀浦の誓
願寺の子余人の土民を下知して戦んとする所へ加藤福島片切堀
尾勝須賀なんど世に聞へたる勇士ども面白き事に思ひたる所
幸に切出れバ何かは是に敵をすべき四方へさんと逃散より是をこそ城
中より堀尾が勇臣多羅尾右近樋口三郎兵衛百余人城戸を開
ひき切て出れバ寄手多勢なるといへども法令もなき集り勢負色に成
れバ何の用にか立るべきや我先にと敗走し討るゝ者数をしらず時に

時に軍静まりて討たる首凡百余級悉く耳鼻を斬て岐阜の城に
送り軍の次第を言上す

毛受勝助返し取馬印

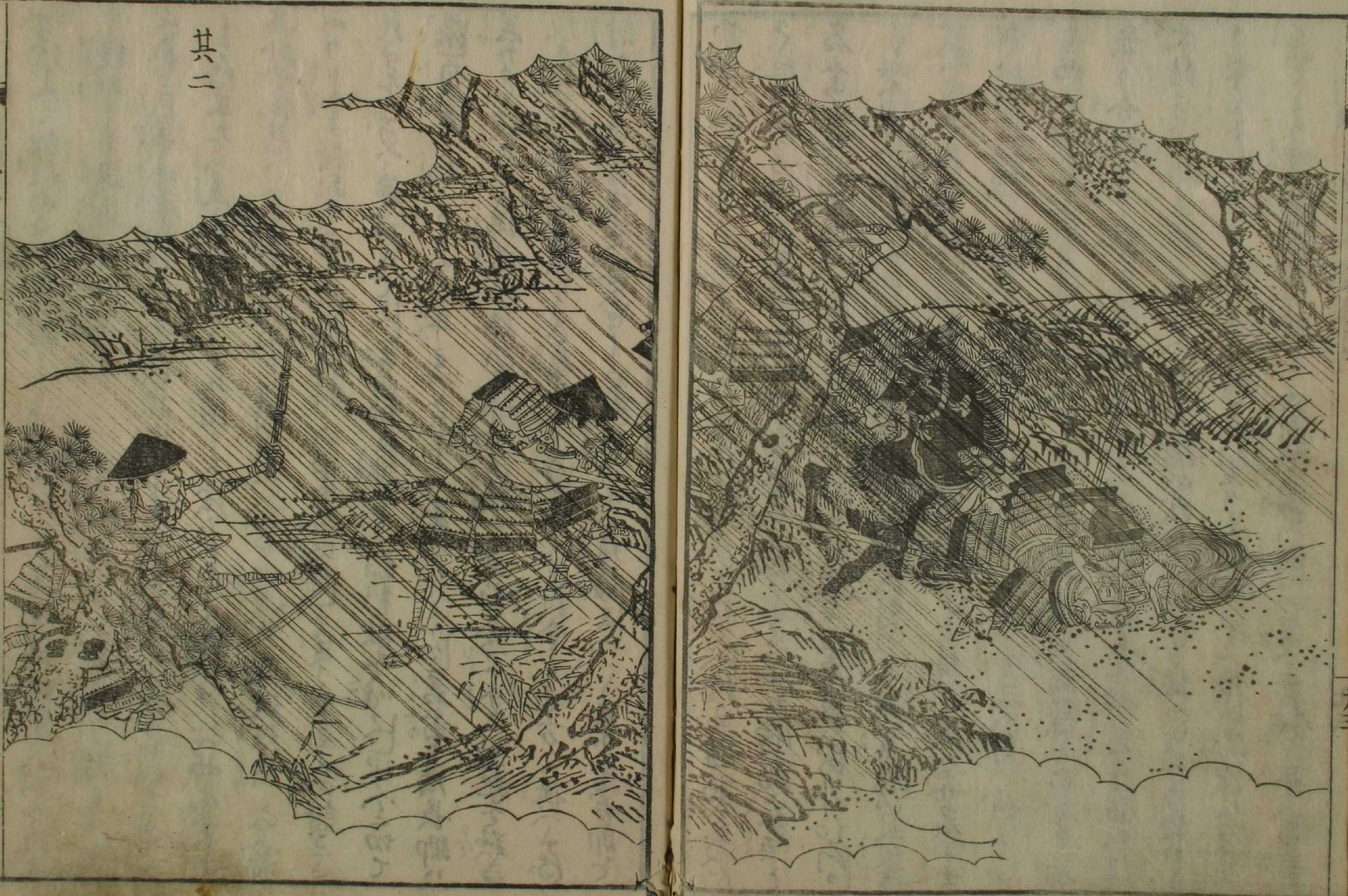
去年長島の一揆とも古木江の城を襲て小田彦七郎信興を討し
るゆゑ信長深く怒り給ひ此ごろ軍事の暇なければ長島征伐の詮議
とて元亀二年五月十日二万余騎を引率し長島表へ出張し給ひけ
るが彼の一揆共多くは本願寺の門徒にて近国近在は云に及ばず東国北
国の門徒とも悉く寄集り七八万の大軍にて志かもさまたぐと寄
兵を構へ信長を討んどの様へ信長軍よりみれる名目なれば
此一揆容易に誅伐なしがたし力を以て攻討ならば味方損亡多かるべ
しとたゞ戦ひ勝たる先途なき土民ともなれば戦ひもせずして退くにぞ

じと思慮なひ其後軍をも返し給ふ去程に長島の一揆ども信長
大軍にて向ひ給ふ事を聞より疾く必死の戦ひを以て天下に敵なしと思ふ
小田勢に汗をかゝせんと待居たりしに信長一戦にも及ばず退き給ふ体なれ
ば何れも是は敵の退くを追討ぬ法やあるまじと門徒の土民又は一
百姓共まで悉く追かゝる信長益くかくてぞと察し給へば小田家
随一の功臣柴田修理之進勝家を殿に備へ給ひたり勝家は一揆原の
追討をうると見えたれば士卒を下知し一当当てゝは引退き突きかゝりは
てはくり引にし二十余丁退きたるに敵方に益て手配りや有りけん大
船又十余艘大田川を押のぼり柴田が勢の正中へ鉄炮を放つ事雨の
ごとし勝家も左の股を打抜れしども屈もせず馬上にて下へ
て戦ひたるがいかゞしたりけん合ふて仕る幣の馬印を敵に奪れ一揆

毛受勝介
馬印を
取
之を

の中より山口茂左衛門といふ男彼馬印を見るや差上鬼柴田と喚はりた
る勝家を我こそ手に討とりて弥兵衛もろとも渾乗せよと同音に
どつと寄る処に勝家安からず思ひ此馬印をとらせんとて馬の頭を立せ
勝家が小姓に毛受勝助といふ強勇の壮者ありて勝家が馬の口をとりて引
留め君一揆の中へかけ入給ふ物なりしがとても小田家の大名柴田殿なる
ぞ討とりて手柄せんと大勢一度に近るぞ御紋雑兵なれども不肖に
はあれども某に任せ給へと云捨て兜をぬぎ袖印をかなぐりすて只一人一揆の
中へかけ入ければ雑兵も山口茂左衛門が傍に馳寄一刀に切倒し馬印を見
るより又一条に馳参しが一揆ども又二十人のがさじと追来る浅太郎を
引抜て手なぐりに薙倒せばすでに七八人算を乱して切られけれ
勝家遥に是を見て毛受討とる勝助を救へよとて士卒を

下知すれば柴田が勢百騎計どつと喚ひて切て入終に勝助を救ひ
て退きたる勝家是によろこび毛受が功を称し是より勝助家照と
名乗らせ寵愛日々に十倍せり抑も此退口の軍思ひの外も周章
く柴田勝家も手負ひされば安藤伊賀守入替つて殿し且戦ひ且退き
一揆の軍兵雲霞のごとく押寄りまき余さじと付来れば安藤が士
卒数多討死し防ぎかねて見へければ氏家入道卜全又入替て戦ふに日
も西に入ければ闇さへもまぎれぬくらき夜に折節大雨篠を乱して降
来り合戦いと難儀なる処に案内知らぬ一揆ども畔高を近付けて
前後より攻立れば氏家入道勇猛の武士なれども備へを立かねせう
りゐくさんぐに成て太田村と引退たる此所にても一揆の郷民三百余
兼てより埋伏し氏家が勢を取囲み追つて責立ければ卜全入道自


其二

鎗を以て敵にあたりさへ戦しが暗夜なりしが馬を深田へ打入たりけれど
も鞭打ども進退更に自由ならざれば終に此所にて一揆の為に討れけれ
氏家が良等西尾勘兵衛桑原右近等主人の死骸を肩にかけて退ん
とする所を信長方より又囲みて遁しなく戦ひければ西尾桑原
其外の良等ども悉く討死を此時氏家入道が小性弓削綾理亮といふ者
ありト全が討死を見しが稲尾村といふ所まで退きしが寔ぞ主人の討れさ
れるを聞き大に驚き死を以て己れ吉田村に馳来り引返し敵を喚び已に人を切て
落自害して死たりける時年まだ纔に十八歳いさぎよかりし若者也信長卿は
其後なく岐阜に帰城し給ひて味方の損亡氏家入道ト全が討死を歎き
給ひ其上柴田勝家も手負たりと聞しめされ全く味方に構へしは
計なく要害の地へ深入せしは我誤りぞと後悔ましまして木下藤吉郎を

右達ながら是不足ハ是まじき物をと操返して寛ひろを垂居ね士
兵卒も一言のいらへもなく整然として居たりける

繪本太閤記巻之五終